

私たちが癒される希望を持つには、まず医者がわたしたちを病気であると認める必要がある。診断のないところに薬はないのだ。芸術は何をすべしとは言わないが、わたしたちの側に立ってうめき苦しむ。すでにそれだけで幸せである。芸術は嘆声である。人間が芸術に呼び込もうとするものは、人生の不調和である。失神、不測の出来事、障害、ためらい。人間が生活に呼び込もうとするものは、芸術にある調和である。リズム、均衡。水平ですべてが滑らかな面ほどいろいろな傷がつきやすく、小さなコブや穴も目立ってしまうのだ。小説について人々が話すときには次のように言う。〈この小説は美しい。けれども哀しい〉。美は哀しみを必要とする、と考えるべきなのか？それとも哀しみが美を必要とするからか？美は哀しみを包み込むのである。あたかもハンモックが身体を包み込むように。美は哀しみを忘れさせたり消滅させたりしないで、それを静かに揺すってくれるのだ。全体的に芸術が不幸の話し手であるなら、マイム芸術が不幸の話し手であることになぜ人は驚くのか？他の芸術にはずっと前から許されている権利が、マイムにはまだ許されないということなのか？マイムは、自分たちの悩みを描くことの正当性を打ち出していくべきである。すでに許されている小説家にはその必要はない。せりふの劇作家にも、映画製作者にも、詩人にも・・・誰にも・・・。これがマイムに対する悪感情への一つの療法であり、それを明確に打ち出していくべきなのである。

「マイムの言葉-思考する身体」 エティエンヌ・ドゥクルー 1998年 ブリュッケ
p.96-97 不幸にも表現の権利を 1951年

